

「生存率50%」からの現在

会員 島村 光



1 はじめに

この原稿を執筆している現在、私の弁護士としての最初の1年間で丁度終わりを迎えたところである。この1年間の業務で経験した様々な出来事も印象深いですが、今改めて感じられることは、弁護士になるまでの私の人生が今の自分に結実しているということである。これまでの自らの歩みを振り返って、私にとっての「弁護士1年目」を考えてみたいと思う。

2 私の「危機時」

人は誰でも、人生の中で「危機時」に見舞われることがあるように思われるが、その内容は人によって事故や病気など様々であろう。私の場合は、最初の「危機時」を迎えるタイミングが少々早かったようであり、高校生の頃と10代の終わり頃に悪性リンパ腫（血液がんの一種）を患ってしまった。

「俺の首のところが腫れていないか？」

これは高校生の頃、私がリンパ節の腫れに初めて気づいた際に、友人に対して発した言葉である。この一言から私の「危機時」は始まったのであり、今でもその場面をよく覚えている。それから1年程度の治療を経て、一度は寛解（がんが発症していない状態）となったのであるが、数年後に運悪く再発を起こしてしまった。

「5年後の生存率は50%程度です」

再発の診断を受け、主治医からこの言葉を聞いた時、「危機時」の山場であった。特別何かを成し遂げたわけでもない普通の10代であった私は、人生というもの盛り上がりもなく簡単に終わってしまうこともありうるのかと、あっけにとられてしまった。

再度の治療の末、幸運なことに、私は再び寛解に至ることができた。しかし、この頃から、私は次のようなモヤモヤとした思いを抱くようになっていた。すなわち、私はなぜこの年齢で数年間を棒に振ることになったのか、その意義を見出せないという思いが生じてきたのである。今思えば命を拾えたことを幸運だと考えるべきなのだが、人間の感情は難しいものである。0からプラスを作り出していく努力については素晴らしいものだと感じられるが、不意に生じたマイナスを0に戻そうと努める作業については、まるで苦役を強いられたかのように感じられてしまう。その後、私は大学、ロースクールと少しずつ人生を進めてきたが、上記のような思いが、どこか私の心の片隅に残り続けていた。

3 私の「弁護士1年目」

私にとってのこの1年間の最大の意義は、上記の長年の間に対する答えが見出されたと思われることである。私の恩師の言葉に、文献に書かれていない問題に直面したときにこそ弁護士はその意義がある、というものがあり、そのような仕事をしたいと考えて私は弁護士を志してきた。実務に出てみて分かったが、世の中には全く同じ相談やトラブルは存在しないのであり、未知の問題に遭遇することも珍しいことではない。自分なりの考え方とことん挑戦できる世界なのだと感じられ、この1年間を通して、私はこの仕事に人生をかけていきたいと思えるようになったのである。

「あの頃の自分が人生を繫いだからこそ、この仕事のスタートラインに立てたのだ」

自らの長年の間に対して、このように答えられるようになったこと、それが私の「弁護士1年目」である。